疎開先の思い出

岩田愛子（坪井町・78歳）

人　物

森　まさ子（34）お寺から疎開してきた、姉と二人できた。
柏木　滋（50）疎開先の大家の後家さん
梅谷きみ子（35）まさ子と一緒に疎開しているお寺のよめさん
新道のたけちゃん（11）滋の親戚の子
御影（隣村の地名）のおぢさん
おばさん

◎信州疎開先の農家柏木滋方の門内農作業所

まさ子　「こんなにトンボ草ゆでゝどうするの」
滋　「乾燥しておいて敵が上陸してきてもこまらないようにかくしておくのよ」
新道の武ちゃんそれを手伝いながら
たけちゃん「おれも十一迄生きていたから今死んでもそれだけはもうけもんや」
十五日敗戦がわかってからは村中でいつ敵が攻めてくるか戦々競々としていた。まさ子は姉と二人で躰に精力をつけておきたいと御影まで鯉を買いにゆく
御影のおぢさん「田圃の中には大きな鯉がたくさんいるから好いのをもってゆきな」
「まけてやるよ」
まさ子　「大きいのを二、三匹もらってゆくわ」
おぢさん　「鯉の小さいのを雀焼の様にして乾かしてあるんだよ。山の中でも山海の珍味がたらふく食べられるから大したものだろー。それも持ってゆくかい」
と戸棚の中の鯉の雀焼を出してくる。
まさ子　「まあすごいわね。山の中で一年中食べられる魚が貯蔵してあるとはびっくりしたわ。それも適当にくるんで下さい」
小母さん　「おかぼも栗の様においしいのがあるのよ」
信州ではかぼちゃの事を「おかぼ」と云ふ
まさ子　「あらおいしそうなおかぼね。それも二つばかり下さい」
まさ子は姉と二人でしょったり下げたりやっと持ちかへる。
そうして一ケ月以上立っていた。
きみ子　「まさ子さん。東京の方も大分納まってきたらしく清島町の焼跡へ寺を建てるから一時高砂のお寺へ帰るから一緒に帰りませんか」

当時の職業なし、年令三十四才（登場人物・森まさ子）

まさ子　「そうね、ここに居てもだんだん寒くなるし心細くなるから私も帰りたいわ」

それから翌日十一月五日の午前十時発の上野行で帰ることがきまった

きみ子　「家の孝丸もとなりのやっちゃんと仲よくなったのにさびしいわ」

まさ子　「ほんとうに毎日やっちゃんが孝丸ちゃんコーヤコーヤと呼びにきて、しまいにはそれが歌になってしまったわね」

そばでやっちゃんの母親が聞いていて大粒の涙を流してとめどもなく泣き伏してしまった。きた時何だか意地悪そうな骨ばかりがっちりした人だと思ったのにいざ別れるとなると急にさびしくて山の中の人の心理がうつしだされていた

滋　「となりの八十二才の殿様が荷物の重いのを運んでくれるといっているがいばってる殿様が珍しい事があるもんや」

まさ子　「ありがたいわ。では布團、勝手道具、お米四斗ばかり分けてもらってあるからおねがいします」

まさ子重いのを運んでくれたのでほっとしている。

まさ子　「新緑のときから紅葉のすばらしさは軽井沢よりも三岡の方が数倍うつくしかったのでほんとうによかったわ」

いざ帰る時は村中の見送りをうけて、いさんで生れ故郷の東京へと別れを惜しんで旅立ってゆきました。

おしまい

体験した場所　長野県北佐久郡南大井村

年月日　昭和二十年五月一日より十一月五日迄